# 丙午雜筆

一

特別
1919
215

176492

# 丙午雑筆

38- 9014

早稲田大學圖書館

○松浦玉圃と云ふ元人は雲山同宗の男で
あるとする時に出遇うことがあるが北男仙童人で
南女は一寸ぬすい八拘だ、自分は時計業を
営むでゐるが、青さの時計を買ひ来れ、此
まゝ分おの時計を買つたのでも元人大いに驚き
青さの分除ひそんな高貴の時計を買うは
為めにならぬと云ふので一首の狂歌を與へて
ることを謝絶したと云ふことき行は北の男の面
目の一瑕を窺ふに足るのである、そこから青さ
の母話をする男であるが、今迄青さのことを保

証をしたれば数の四百七十餘年上ると云ふことである

○小説家の松原松葉の親は松原正人と云ふて仙
童の人である、雲山桜亭の青さの時代にて北人の家
に寄居したことがある、ある年の蕃に松原の
妾が外に年始に初人の家へ第等に出かゝる
とて桜亭に塩鮭一本を掛けて供につれ出て
出たことがある、桜亭は其代人に向つてあんな
病に障りたことをしていとコボシたことが
あると玉圃は語つたが、こんな余の初めて

早稲田大學圖書館

可ゆする様色の迄話ひある

○赤城文部が旅順へ出うけて内探した話の一

に曰く旅順の軍港にある敵艦を二百三十四

とも砲撃して悉く撃沈したのは単に我の

砲力のよくなることと誰れも信じてゐるが実は敵

の自爆（自身の沈めたる）は固ものひある、我砲の如き僅ゆると共

に上とも廃ひする砲線を以て軍艦を撃

沈せしむるは容易にあらず、その見るに沈め

得たるは渠等自ら沈めたるまで何故に自ら

沈めたるやと云ふに艦を乗ひてあらはしつ置きたる

我砲の狙ひ撃の為危険ありしきのみならず艦

の部を損することも亦比大なり之れを防ぐは

寧ろ自ら沈めて狙撃を免ふん、（バルチック）

艦隊まで援ひの時修繕（元を浮ひて）を施し之れを用ふ

為めに艦隊を多く損せず（自ら）沈めたるなりと

枪を脱して（艦）を導き（自ら）沈めたるなりと

或はあらん

○小村の支那に出うけて不平陸な外交を考へ

たのを見て大隈侯曰く小村は為人で利害大臣

をなすのする体力を見たるに、是れは氣の事

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

缺点ひある

○お行儀などの桐飾の式をみると葉茶壺
[illegible]置物と同じく[illegible]飾りとの一
つゝなりてみる、こんな茶をのるゝ壺いう呂宋
とう南蛮とかいふのが爲物を愛する上から
飾りことのとしたのびあるゝ、えんなりしたる茶入
世の飾りとのことばに[illegible]木きなる壺をと[illegible]飾
[illegible]ぬなりも変な御と思つてみるなぐか
あゝ調ひたるとこんも矢張り実用にうる
来たことのびあることゝの知んだ、あ初も茶

後世にて目何るも死式ようなる流れて初めの
頃分を先づてみるゝが方初は茶壺
のことゝも決して飾りのなんも其壺を出
して並いたまけびなりいたる論茶を
入れて客に何んの茶を能くするや之れを目
前に並て選擇せしめたのはひある、たる
い茶の書物をみるに[illegible]客を招き茶を
進めんとするにはどの茶を進むべきや
と自分も物の茶の目的を出して客
に選擇せしむるゝ例とするにみて後

早稲田大學圖書館

早稲田大学図書館

早稲田大学図書館

一例を以つて見るべしである（以上三條一月二日相記）

○我邦の古寺大刹にて多くは雪舟や菊白などの山水を畫えた屏風がある、そしてこんを山水の屏風と称してゐる、こんは單に實用のみなるのみなるのと思ひ深く穿鑿もせざりし處、北とうゆかけば、こんは儀式の用に供するものにて佛法に典故あるも授戒のときに山水の屏風を用ゐる法式にもとづけるとあり

きこれ此事十一月法の國華を考へるべし

○齋院十二月二日清國出洲高書江部淳久にて

船中にて雪のうすをいろくし聊したかに左の如き紀らすがある日本にしし菊花とせるこゝに如きを紀念とす

一明三十日も洲にあり着いたしも今高ハ湖南省の首府にして浙江の清流に流ふて遠くも人物と米とを以つてゐる意とするにしん人氣もなくかく到絶の國こゝを

佛國にて實證の治安策を草せる治安也あり當廟あり稍河に流ふて上んば舞三苗を進せ并死すといふのもあり　三宮太夫廣瀾

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

せらるゝものゝ是ハ朱子が遥ゝ江西省の白
鹿洞を出で来りて帷を垂ん諸生を教へなる
すあるもかの学園蔵古相道皆北門らも
出なりとしかれ今ハ壊たれと洋式の書道
拙ゝとて方寸学の先と相乗ることを不謂所学の
勢なるゝことの世界に蔵東悦宮が講
義せる正来異ゝ今ハ中学等となれると
思合ハすんば一具ゝ名ハすや
十二月十万附寄郵を東書の俗ゝ取ひ

早稲田大學圖書館

の元コの楽しい法れ

春日方炊日方粗なる為至てまずれ、小生等の食早いボーイ
但せるて毎日承、大根、白菜、卵みなるまハ当惑、所拓
上海より拓の帯せる福和漬を開いて天下の膏粱、八分無
の珍よりも珍とする位にて誠に情なくれ、是も一ツの修行と
諦め居る（毎日生活の一節ハ此舞台居る雑誌（送り来て
了ゆゆ日上ゆゆ）、船中にてハ学問上の諸教大く
此間達我勝る（其作詩を学びて三国志をよみ、只八をつらぐし、

十二月十万附寄郵之事書の保存ハ

有所長に出発以来、航行分何の事もなく、洞海の収穫
も無くて、随て申上べき事項も無くて（此は先輩迄上陸
迄二十五日、其間附郵の便も無く、可然一事の左右
を伺れ、各国も可為にあれば、新橋先生より
至急伝達ありや、小生何上五十日ニ六十日位、居宗の
屋、食事もまづく（秀才より他人にて心地）其他庫に旅行所居、
可何を通アレバ、湖東倍人多き地にしてかの
法国会を荒したる賊、供奉令も遂に長州城を抜
く能はずらしめのみなるず却て賊を全陵に屠りて清廷
今日あらしめたるなり、昔ハ屋年、周茂叔、曾国藩
出で今ハ学者王先謙あり中々よき所にて（地場の）変化も著
しられ、湘江を出で洞庭を出で更に沅江に入りて
蜀軍に接し、岳州、常徳、武陵、桃源の諸府郡
洞の要にあり、荒郡、漢口、米を計し米の産出
の量、一石（日本の五十六升）位かに二百四十戔、皆ハよりくれ、しすし
春日方快き方想なるを至てまつれ、小生等の食事ハ不ーイ
但せるて毎日承、大根、白菜、邪みなるにハ当惑、所有
上海より携帯せる福州漬を開いて天下の膏粱、八分無
の所よりも珍しすると位にて誠に情なくれ、是も一の修行と
諦め居る（舟中生活の一節ハ先輩の居る雑誌（送り無く
可然に申上げ）、船中にてハ学問上の諸教大く
我国造我勝れ（其作詩を学び、三国志をよみ、只八をつぶし、

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

飼る價値のあることのみである

○後朝の別れをきぬ〳〵といふことは互に思ふや
ハ男と女の衣を着也は男の衣を着て居る者あ
しけれ　なるとて私のんしう衣をきこくて心の
ゆゑなるかくいふなり

○延恵文蓂のことは　つき　大條田宋儀の俗語に曰く
手紙に関するとぞ　あれ故味ある風俗を絵に
ある延恵文蓂、これをついしたまひ京都に行ん
たるぞ新年になると風雅な賀衣束をして延恵
文を蓂にしきました、その紀原は禁里の大

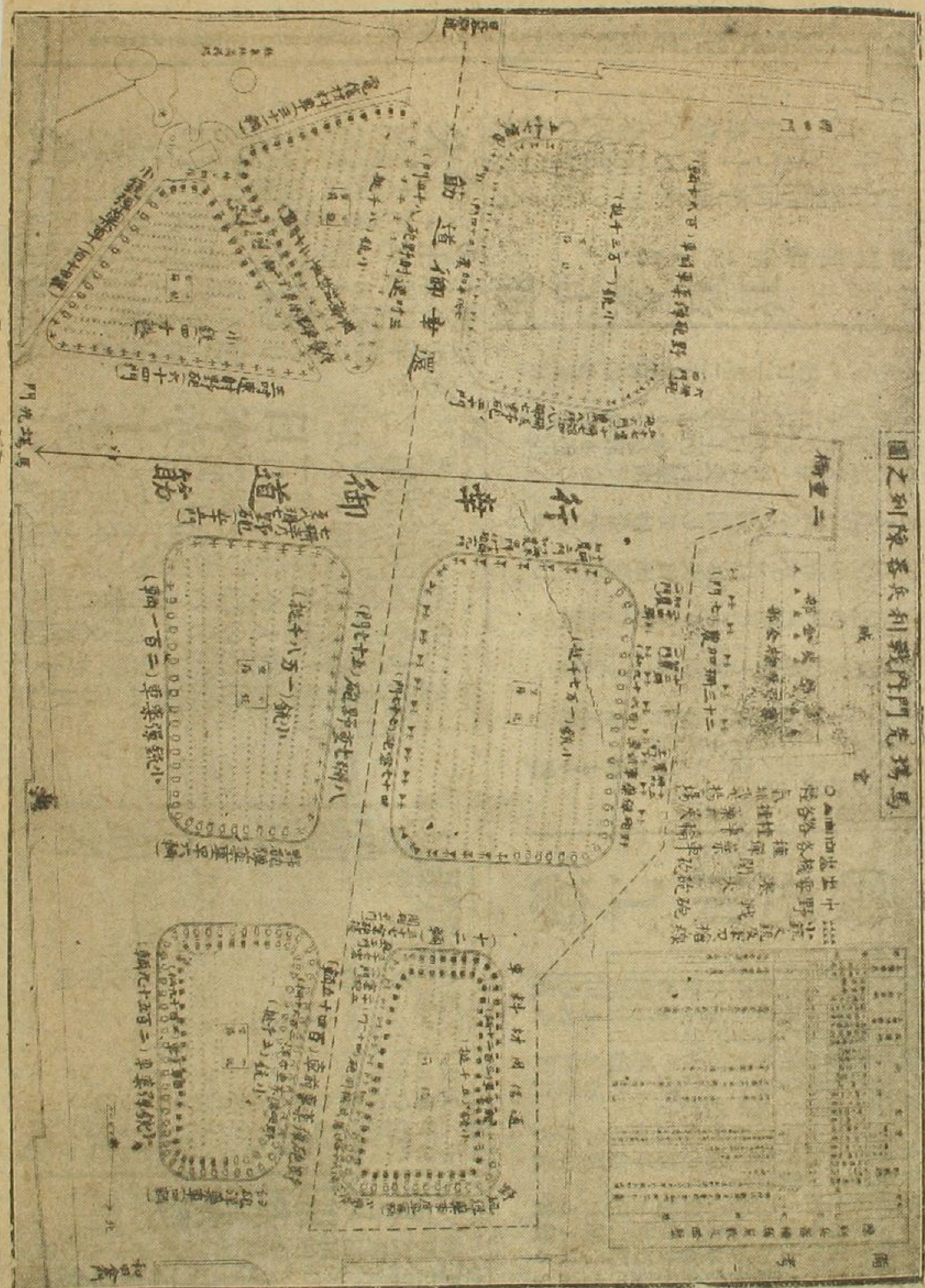
早稲田大學圖書館

祇人から輪じたものであるまた　帯てる似て飛ぶる
を犬とはしません　犬蓂（タデ）、犬法河（ツルメソ）（夏の市なる法河）
ことは即ちその敵ひ、この犬祇人も、禁里の祇人
ま似て飛ぶることと云ふ意味ですが、何故ツルメソ
と呼ぶことといふは平素は弓屋所の住んで弓弦矢
別なるを心ってなる人が丁度祇人のゆうな風俗
をしてつる花せしと武士の家々を喜ばれ
そのつるめせが訛って遂にツルメソとなったのです
この犬祇人（ツルメソ）、正月ならば又、一年中の暦の上にある
刻出した光函を、優美な恵文を得る、元日の

早稲田大学図書館

福祿鴛鴦
文章鸞鳳
琴瑟在御
鴛鴦千飛
鸚鵡杯中浮竹葉
鳳凰禁裡奏梅花

恩義楓陛
慶溢萱闈
乾坤定矣
鐘鼓樂之
天成良配
夙締良緣
珠聯璧合
鳳翥鸞翔



○日露戦争凱旋観兵式を挙行せし時馬場先門外
の広場に陳列せる戦利兵器は未曾有の壮観
なりしか其の多くは東山氏に於て保存せら
れしか此の広場の一隅に立てられたる楠公の
銅像は尚其の儘に残れり其の時の事を記念せんと
発起せし人ありて其の図を武蔵の清秀
に掲げしもの也 凱旋紀念の清印
ある保存したる也

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

○當紀念祭の表紙意匠をいろ〳〵に亂し出、黒木綿の羽織
の當の紋を白く抜き黒の色を定く褪めたる面をあらはし、斜めに
下に無く瀧縞を出したる當と坪内の表面をあらはしたり大図を
作らせて又此も出来而無くなる後者の後のことに見えて
東京なるまぞ更なる意匠を敷らしたるまゝ基多き
黒ずゝ又[illegible]なる聖代の物なるものに極上の主を以て天下三記者
の五家を書くことを極めた、紙の産なる不良に暗く當し
服装を寄し無も又天下に紀者の名物を寄し當
此のコントラストも極引き立、意匠又上不なるを覚
内、左に掲ける紀念祭し勇敢に掲ける當自畫自

早稲田大學圖書館

明治二十三年二月十六
近江新設拾週年の
紀念
山田君画弟と賛
大津繪

之は絵字なし
巻首の掲げたり

之小を菊一頁より山形を
頼る

おほつ見

さゞなみや滋賀の
あたりと見渡せば比叡比
良山の雪げしき古りし都の山作良
ちる花よりも華しき明智のさまや鳥
羽玉のくらき闇跡に君ゝ代を決りを添
ふる疏水門通ふお方は首尾をしてぬめて
こゝは近江鉄やふ山しき隆瀬三井の寺長等
の山はあからふる勢りも堅さ石山や濃紫の
色増さる式部のほまれ大津繪ようし
てうたふ今日挑めでたさ

おこし



[illegible]
里ずゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]
の五字を書くことを極めた、紙の屋[illegible]
服装を[illegible]又天下に紀念の名称を[illegible]
此のコントラストも[illegible]引き立、意[illegible]又上[illegible]
内、[illegible]紀念[illegible]自[illegible]

早稲田大學圖書館

○當紀念祭の表紙意匠をいろ〳〵亂した、黒木原の刑風
の山田の役を白く抜き黒の色で褪めたる雲をあらはし、斜めに

早稲田大學圖書館

賛の事、特に即ち近江新報に掲げたるもの也、山田を
供ふ料まとて交に数ひとて云ふ（明治三十五年五月頃）
○星亭と云ふ男も流石ぬけ男であつた、此ところ
不しに事実であるべき徒のまゝ紀念に殺人に
江内ら手を廻して早稲田実なお即ち大隅頃の
の出地の買占に入れ抵つた、追ひて津山に買占
めとゝへ自分の方を痛し又[illegible]大いに学校を
興し早稲田大学の向かを張る積りで現に大
略の設計図まで作つた、此花ひあるとこの彼人の為
へでも大隈の学校を潰さなければ此方の

を取ることは維持することとして出来るべし、そこで早稲田大学を潰すの陰謀をかけて特に早稲田の地を取られ向ふを張るも津山の土地を買占めて学校経営をなし振るも、漸やく地價上ると不用の土地を売り飛ばし之れをかけて学校経営の基を定める心算で内々計畫中不幸[illegible]千に覺ん第一の休せるとしてこれ、是等としてこれ[illegible]任意をもしたもあるべきことと思ひし

○寺本姫雅子一家[illegible]人も高くし来つれ仲原二左に叔ひ曜嘛教の御守ありて[illegible]を振る

ことのとなく

早稲田大學圖書館

○徳家の庵印を集めんと心掛けたのは此年の十七ことなり
あるくづ此法を一向に集めまゐらせ、庵印倍り一書を
初めた金をする目録をいつもや旅館中にて記した
頼る記膳するう其後才二書の如の数ぐ約四二百四
五あるもあらう、其内稍々著名のものゝ文を摘記する
と左のめくしである（三十九年十四月二日）

並木五瓶　引馬文庫　思玉の中に頼家ハアリ
作伯文庫　田中頼庸印　錦石　原本蔵石ニ
新宮城書庫　田藤文庫　曼珠図書之印
山岡文庫　山岡浚明　陽春廬記　青蓮院記
阿波図文庫　三聖寺　濱耕雨之家庵
藤原貞幹庵書　吉亨斎外史印　平田原寄家庵
高山寺　松陵学問所　不思文庫
芳宜園庵　和学講談所　浅草文庫
梅宇　湯島狩谷氏求古楼庵書記

早稲田大學圖書館

正宮蔵　也森宣蔵　椿氏珍華書圖書記　桂山

清水濱臣蔵書　泊々舎蔵　柴氏萬基橋蔵書記　栗山

尚不愧齋　弘前医官浜江氏蔵書記

朱　翁　御書物方　官本

史官之印　書籍館印　日本以　太宰府文庫

一六居士　寧齋　右院蔵書

寄春坪堂　薑氏山樵酒井蔵書

山陳氏太秦廣隆寺　大日本帝國圖書印

○森田某洲の書にしたらしい手紙に春街とよふ名の書えて
あつた　油くさ見ると森田の山石の書り付て居たし
此の箱にあるものが如んだ

○春谷小波と書るのを無りしに　新に一六翁の事も流れ
に上つた、小波の云のまゝ家翁は日記を書く習慣ひ
ありたらしく　日記は大分津山ある　大も旅行中にて
別に旅行記を書て　そる、こんまゝ即時の紙や鳩紙
なども書てあつて面白かつたい　又小波は世のまゝ意味を
しかのまゝ翁が　諸方の雪の底に　屋根や塀を
書くまゝ　ぬしまゝ　あしらん　手帳に　狩を起し

早稲田大學圖書館

早稲田大学図書館蔵

早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

詰ふれらるゝ近く使者を以て右の絵をまゐり示すも
請ふこん鈔の者は踏も出ゆく近き事なる云
こ

○露作の絵毎年中魚の関するいろくの絵あり
ある紙に泥鰌の紙にの一節は御絵を賞す
世ゝにおのつゝ奇なることもあるものなり泥鰌
の骨格をかしも傷つき損せさるゆゑ踏し留めて
悉く其肉を除き去らんこゝに何人が取て之
を能くすべき紙なる博物なる用のる標なる
泥鰌の骨格のなる備しなるを要する由ありて

或人ぬけるかしに之を四人と思ひを甚めるに来、こは
ろぎの泥鰌をぬるゝて殘りて食ふことあるべく
して泥鰌汁を粥高けるを家なるこはろぎ毒
く鮮に集ふこのなりといふことをなすき試又は
蟋蟀の殘るる俗となる蟋蟀のぬるゝ
殘るゝ事やあらむ又ぬるゝ涎をを吐き
うけて紙にするやらん一枚にしてさしも脆く
細き泥鰌の骨格をばかしも傷つくることを
美しく踏しに其肉をばかしも踏さず殘
去りしこうば手を拍つて驚歎しん深く

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

悦ひしといふ猫の鼠を捕く能の飲例を見ふこ
ときは己が命を整きこ身を保つおのづからのわ
さと又あるこはろぎと泥鰌を抑く何の因
孫あるとて我はかりは鰓鰌の泥鰌を鉄ひ出
すなり此のうちはこんを我量の上に心入れ深き
精淵筋に心ゆるなるまゝが此るをきくして後の
秋の初に鰓鰌の鰓をきくれば今のこは
ろぎは即ち古のきりしすなんば彼の蓋
金山の鳴ある鳴くやこ家初のかゝ是にの孫を
思ひ出つるらは、あく床の下のこはろぎよ泥

鰌迹しさるれはかりは鳴くかや、と思ふ時の方
急うまくなりけり　猫と鼠とのおぬかしさるは
歌にも用ひ得べし、こはろぎと泥鰌とのうちは
おかしけんど自然にも用ひがたるべし泥
鰌は小なるを柳葉泥鰌といひ斑あるを鷹の
羽泥鰌といふ　泥鰌といふ鰓のひゞきはぬ
ましかゝるも柳葉泥鰌といひ鷹の羽泥
鰌といへは歌にも用ひ得べき語なりしを
しき色紙又は短冊の上にて泥鰌のうちな
んば跳ねまりはのうと見えしうべし

早稲田大學圖書館

（開付ち叶）

○露伴曰く「法悦といふ語あり 強悦といふ語あり 今
これを敷かれて畫家の畫を作る時の純粹の藝術上
の怡悦即ち両者味を畫悦といひ、詩人の詩を為る
時の純粹の藝術上の怡悦を詩悦と呼ばん
畫にも必ず畫悦の意ともなるべし 勉強のうち
まるべきなり 詩にも必ず詩悦の意を見きて来るべし
し勉強の意を見きて来るべきなり 一切の藝
術すべて皆是のみし」

○鹿野勇のうちに見てきていふ事也 隨事中に書きて

志ましたるものあるしが、今露伴の隨事を見
るに同じ様なることを記しつけたるに今石に
抄出し彼是参考の様に覚すとなれば
鹿野勇は鹿野といふ獣の陰部にも腸のあれ
りまひを剤りこれなれ干せるもの正真の果す
腸に勇氣あるといふ事あるなれば腸にも
其の真の勇氣あるとなるに近ければ連絡
なしに自然の論とするなれば鹿野勇を
数ふるに一ト腸二々腸といふとぞ此の獣
牝牡相連ふて雖然大に動く深き其の腸に

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

いよ烈しくなれば其の子いよいよ上るところ、此の
子余の臆断に非ず、此の麝鹿章に二書あり
詳しくは記して見るべし、書のこと多くは花より
出す草木の花の雄蕋と雄蕋との相
接觸して花粉の更授を遂げ生殖の作用
を学ばんとするに当つて花の香を発し大に
通り為すことのなり、る合の花の如きは花瓣
花蕋云に大なれば其の何物ぞ芳香を為す
かは之を捨して為ある可知なし、菫々菜、玫
瑰、薔薇、ミヤマミン、ヘリオトロープの類一々

こんを捨せずと笑、差し此等の七の事皆其の
生々の作用をみすところの花の開くに当つて
如めて芳香を発し、不謂菫々菜香の玫瑰
香の等の類を乃ち浸出蒸溜ポの方法によって
其氣を捕捉するなり、さなれば此の嫌ぬ子の薔
すところの香の氣は殆ど皆の情乃ち非情の
或る熱型の香といふ所以ぬ嫌ぬ子の
此等の香を脱薔しに其の馥郁なる氣のや
に身を置かんと欲することや 沈香 白檀の類
に人の心を消極的に衝動し麝香 バイレツト

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

の程を積極的に衛動するがめし、なまぐつう佛
家の式に法木を鳴くこと多く 既焼の如光、鹿取
香菫々茉を佩かること多きが故の聯也
のみにもあらじ

○後にこゝに稱する中野基を極めしがゝる故の
親兵式講國船社勅祭に隆し給ひ后者紀念行
たこのきを發賞するにあらず 殊に為れて
極に至りたる也しかるとも謂の事也も証元にある
さるべし而後の國の賞賞に群衆の旅出して警
を憲兵も殆日人と相するの國にて自數終に近む

まて噴水器をゆりて所をあひ也僅にして退散せし
めたる能なり、北の群衆の間にて[illegible]先を
多くに出かけたるもあるも局の門前を充たる
ら市しをなし、局にて命して二人を遣ひ
長尾船をなさしめたるもちさしを或は二哩に及
べるもあるも而して這[illegible]の時間にて北の方數
の三ケ一にも賞りたるに能りす、そんなのみの程
衆を減して或は石を飛ばし或は局を熱
山の後援を惹き起すに至んり、各局の指揮
或許あるも[illegible]もあんとも仰んも安の勇なりしとも略

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

うき作業上にて十二三の形雑あるを見く戦役
の文字を讀みて戦役と印刷しあるもとんと不得
る可く百大勝利の凱旋式として
画ける武者の服装陣幕の模様を時代
まちがへ何とも何とも云ふ可らざるにこれは
篠しれ未だ多数を皆含みしむる紀の命を
既につきたる紀の識見其價を欠く
ますま済そつきが外國人に見せ物がましきこと
まり安売なのもまた其の拾に貴
（以新聞）の報知なるより戦争をもあるに似たる

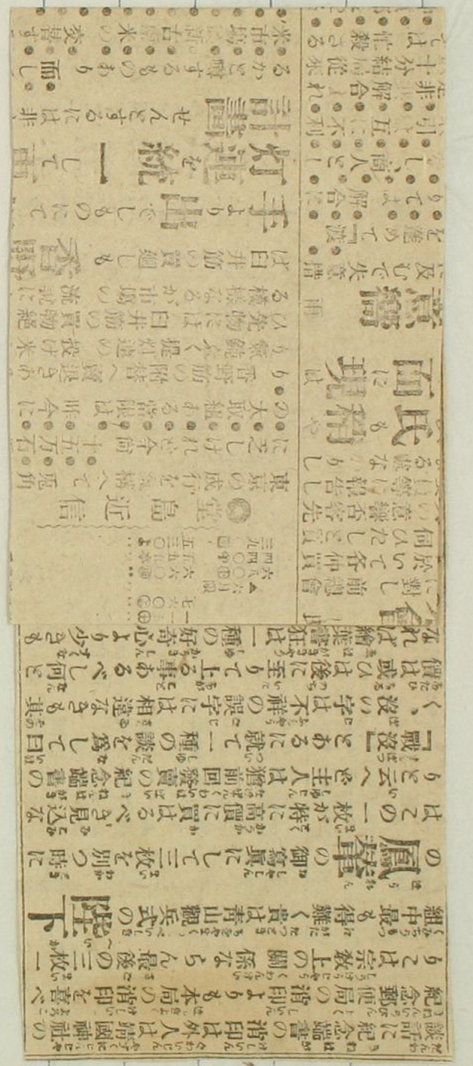
早稲田大學圖書館

◎繪葉書の買占

未曾有の大混雑を極めたる遞信省の紀念繪端書賣出の一昨日買手より更に轉買して一手に買占めんとせし銀座の繪端書店上方屋は拂曉より七ヶ所の郵便局に多數の店員を出張せしめたり今同店主人の談話を聞くに午前六時の賣出し當時は一組一圓にて買取りしが時刻が移るに從ひ八十錢七十錢と落してつひに五十錢にて買込みたりされど買手は悉く慾の爲のみならずして全く紀念となさんが爲に夜を徹して買ひ爭ひし者多く店員は一人一圓紙幣を百枚づゝ即ち百圓の用意して行きしも**一人が百枚**を買占めしはあらざりき賣手は當日のみならず昨日なども朝より賣に來る者續々あれど目下の所にては**五十錢**を相場としドン／＼買入れ居れり賣手の多きと共に買手も少なからざれど同店は他年の後相場の上騰するを見込して今は賣るを拒絶し居れるが**二十年後**には一枚數圓に上る見込なりと語れり同店は横濱にも支店ありて外國人を得意とせるが彼紀念端書は**外人**の**希望者**も多く續々買ひに來れどそれさへいづれも謝絶しつゝあり外人の談話には外國の繪端書商にしてかゝる機會に乗じ一手に買占め置き後年價の上ると共に賣出し巨万の富を造りし例も少なからず同店も利益を他日に期して今日は一切賣らずして貯へ置くつもりなりと云へり又同主人の

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館



○高田は[illegible]が[illegible]の[illegible]貴[illegible]受けて[illegible]
れ[illegible]の[illegible]鐵雲　と云ふ[illegible]
だ、[illegible]の本がある（[illegible]早稲田[illegible]）
[illegible]古代文字を刻し[illegible]或る[illegible]の石片を
[illegible]しれんことを[illegible]きものを以て充さんとするが
其の文[illegible]の文[illegible]相[illegible]
[illegible]一[illegible]と[illegible]誤ある[illegible]
[illegible]ある字を比較し[illegible]同様の字の[illegible]
[illegible]と或る字が[illegible]連結し[illegible]ことも[illegible]
[illegible]さて[illegible]と[illegible]

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

頃ひ尺ふるとこれを[illegible]東郡に於て劉河南湯陰
縣に土人が地から掘り出した亀板であることがて
うつた北の亀板は五千餘片も掘出したが何れも
刀筆で字を刻した[illegible]ある、そこで劉鐵
雲と云ふ人がこれを而あるいとそのので千片ばかり
とを選ひ之れを石印した時したのが即ち北の
本である劉鐵雲の記する所を信ずれば毛錐の前
漆書なり漆書の前刀筆なり亀板の文字は
即ち是れ殷人の刀筆の字を所ありて余亀の
事を記せるなりと果して雲の云ふことくト筮の遺

早稲田大學圖書館

物[illegible]固より遠うる確言しうべし[illegible]偽
りは占トの遺物とすれば支那に於て早く其の像
を見ひ得る余亀の[illegible]面づけを[illegible]見ゆるを同じく荒
しかしながらして支那と日の象形文字前の文
字なりとせば文字の研究の上に好個の資料
なるべし、或は云ふ[illegible]文字を換ずるに同形のこの云
ひ[illegible]以て推せば平洋[illegible]の記音文字の
[illegible]支那に於ても象形字を用ゐる前に記
音文字を用ゐること西洋に於けることくなりし
も知るべしと

○書翰并に手書思想を写すことの二三を書きつらねてみん

誰にやありけん常に書手紙を綴てもしと云つれことの

ある 此家は口でならびに語を言ひ直すことも出来

ますが手紙を一旦人に送ったら其の文で心にかかることを後で

こうして直すことはどうすることも出来ない、

聞きとる言語の交際はなすことや人の感情を傳ふる

ことなどは手紙にて言語よりも

要する意を用ゐざりければならん

人或はいはく手紙の注意を用ゐるに及ばず

文自身のこときは用ゐざれこうれは

修辞を論ぜんやと一直におもえる人も世の中

にあり多数を占めてあるなれど按ずるにこれは

正しく謬見である、手紙は因を示す所の表情の

機関であることを忘れたるか、単に用を示す

うえにては電信の簡略を主とすべし此は音信でも流

暢の手紙は其の目的を達するであろうが、表情

の機関たる點においては礼儀の手紙の如く

自分の情をあらはすにも修辞術を要する人の情を

動かすにも修辞の術を藉ることを得ず、此の一方より

見れば手紙もまた論一種の文字でもあろうの文字

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大学図書館

早稲田大学図書館

早稲田大学図書館

早稲田大学図書館

以下全て

白　紙

早稲田大學圖書館

明治三十九年

一月四日起筆

春城陳人